

火葬場探し

庫発りべるき

このソフトウェアは体験版です

「この物語はフィクションです。実際の人物・団体・事件などとは関係ありません」

三十五歳のその男性、つまり俺、長浜清人^{ながはまきよひと}は憂鬱になっていた。そして、なんて言えがいいのか：何かしらの勢いを心に抱いていた。

気分が悪い。吐き気がするほどの絶望。乱暴な思い……ああ、あれこれ考えるのも面倒だ！

……こんなふうになにかにまとわりつかれたような興奮をすることもしばしばである。

その感情は自分がなんとかすればどうにか消せる、というものではなかった。そんな状態を持ち越したまま、今日のこの日を迎える。

……父方の祖父が、亡くなったのだ。

そして俺は葬儀のため、この朝、礼服を着ている。

さらに、葬儀のため、行きたくもないウザいところに行かなくてはならなくなってしまった……

俺の父さんが運転する車で両親とともに祖父宅へと向かう。会話は……あつたつけな。

祖父の家に近づくにつれて、道路上ではちらほらと案内の看板が見えてきた。

やがて祖父の家に到着。結構長い道のりだった割には早

く着いたような気がする。

普通の家に葬儀のための飾りつけなどがしてある。日本にいれば普通に見られる葬式風景である。

そう、普通なのである。その普通の場所に、俺は異常なまでの苦痛を覚えるのであった。

身内の葬式だというのに不快感しか感じない。世間一般で言うところの故人との思い出などには、考えは及ばない。

やがて玄関にやってきた俺たちは親族に挨拶をした。

周りを見渡すと、一人の男がいる。その名は長浜道夫^{ながはまみちお}、六十四歳。

奴との挨拶は化け物を相手にするつもりで、しかも相手にその感情を悟られないように交わした。

だが……

本来なら敵意むき出しで、相手に自分のことをおぞましいと思わせる挨拶が俺の理想だった。この場の状況を考え、強引に感情を抑えたのである。

——ああああ、なんだろうね、この気持ち悪さは！

……まただ、また、この悪しき感情に俺は支配されていく。

あれこれ考えていても疲れてくるだけだ。さっさと入ろう。

ふと道夫を見る。道夫は俺を見て何を思うか。気持ち悪いものでも見ているような感情を、しかし、表には出さず

心の中に留めているような感情なのか。

——互いの腹の探りあいかよ。ああ、もう、ゾクゾクするぜ。

やがて訪問客が次々とやってきた。なるべくなら顔を合わせたくないが、少しだけ顔ぶれを見てみる。

かなり高齢と思われる人が何人かいる。祖父の友人なのだろうか。

訪問客は俺を見てどう思っているのか。まあ、腹の探りあいじみたことを考えることはないと思われるが。

俺は両親の表情にも目をやった。母さんは：：何か考えているようだ。この場の独特の雰囲気を感じ取っているのだろうか。ちなみに独特の雰囲気というのは葬式という意味ではない。「奴ら」が作り出したもの——

父さんは：：なんといいいいのか、実の親の死に対する悲しみもあれば：：やはり「奴ら」が作り出した雰囲気にとわりつかれたことによる複雑な感情があるのだろうか。

祖母の様子は：：：：と思ひ、俺は目を向けてみた。しかし今の俺は、独特の雰囲気のほうがどうしても気になつてしまふ。そのため、祖母についてはあまりわからない、となつた。

他にも親族がいる。彼らは俺のことをどう見ているのか。：：ん？

俺は親族の一人のある男の姿を見つけた。長浜津安、三十六歳。道夫の息子だ。

そしてソイツも：：俺にとっては警戒すべき化け物だつた：：！！

津安がチラッと俺の姿を見てきた。俺は一瞬、緊張感に見舞われた。俺は津安からそつと視線をそらした。露骨な態度にならないよう、自然な形で。

津安のほうは：：俺に何か言いたそうな顔をしているようにも見えた。

いや、関わりたくないような様子とも解釈できたか：：

それとも、俺と同様、腹の探りあいをしていたのだろうか？

——ああ、さつきから周囲の視線が気になつて気になつてしょうがない。そしてそれを態度に出せないこのもどかしさよ！

：：もういい。とりあえず今は葬式だ。葬式が始まるんだ。そちらのことを考えよう。

葬式は仏教形式。お坊さんがお経を読み上げ始めた。

俺は祖父の遺影に目をやった。やはり、故人への思いとかいう感情は沸き起こらない。

やはり感情の入り乱れと、化け物との対峙といったことばかり考えてしまふ。

とても身内の葬儀に参加するときの心構えではないであ

ろう。

だが俺は、この場を世間一般で言うところの葬式とはまったく異なるものとして扱っている。そして、そうすべきだと考えている。

やがて焼香。そして俺の番になった。

一通りの流れを終える際も人とかかわらないようにしようと思き配る。

やがて、葬式における一連の流れが終盤に近づく。出棺となり、俺たちは外に出て身内一同で棺を持ち、霊柩車に納める。色は黒で、普通の自動車をきちんとした形にするべくそれなりに手を加えた、といったところか。

そしてこれから火葬場へと向かう。程なくして俺たちは葬儀社のマイクロバスへと乗り込んだ。

そこで俺とその両親は手ごろな座席を見つける。とりあえず「化け物」と近づかなくてすんだ。

そう、化け物と――

化け物、化け物、化け物……！

道夫と津安のことである。やつらは俺に、化け物と呼ばれるにふさわしいことをしでかしてくれた。

もう、三十年も前になる。俺が五歳の頃だった……

今は俺の両親はどうか、と言うべきか、それなりの夫婦仲は維持できている。

しかしあの頃は……

両親の仲は、絶対に良いとは言えなかった。

〈続きは製品版で〉

〈お断り〉製品版では一部暴力表現が含まれておりますのでご注意ください。